

令和 4 年 5 月 22 日現在

機関番号：32660

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K02548

研究課題名(和文) 社会の形成者としての資質を涵養する特別活動の積極的な生徒指導機能の実証的研究

研究課題名(英文) An Empirical Study of Active Student Guidance Function of Tokkatsu to Cultivate Qualities as A Social Former

研究代表者

中村 豊 (NAKAMURA, YUTAKA)

東京理科大学・教育支援機構・教授

研究者番号：10509938

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：2018年度に大学生1826名(22校)対象の予備調査,2019年度に中学校の教員と生徒対象の本調査を実施した。有効回収数は教員分が462名(15校),生徒分が8587名(15校)である。特別活動への積極性が生徒にどのような影響を与えているのかを分析するために,クロス集計による相関を確認後,多変量解析を行った。その結果,話し合い活動に積極的に参加及び体育的・学校的行事に積極的に参加すると自己肯定感・人間関係スキルが高まる。担任が支援していると,話し合い活動に積極的に参加することが自己肯定感・人間関係スキルの向上にもたらす効果を高める。特別活動は学級経営と密接に関わっていること等が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では,コロナ禍以前の中学校における大規模調査を実施し,膨大なデータを入手することができた。また,特別活動(Tokkatsu)研究では,社会調査の手法によるエビデンスベースによる研究が少ないという実情に加え,生徒指導との関連を実証的に研究した論文はほとんど見られないことから先行的な研究として評価できる。本研究に係るメンバーは,特別活動・生徒指導の経験があつたり関心が深い。研究メンバーの興味と関心にしたがつて特別活動と生徒指導に関する論考を執筆いただいたことにより興味深い資料集を作成することができた。これらは,これからの特別活動と生徒指導の密接な関係を考える上での基礎資料となる。

研究成果の概要(英文)：We conducted two surveys: a preliminary survey of 1,826 university students (22 universities) in the 2018 academic year, followed by a survey of junior high school teachers and students in the 2019 academic year. The total valid responses used for analysis were 462 (15 schools) for teachers and 8,587 (15 schools) for students. From the academic year 2020, we conducted a quantitative analysis of the impact of proactivity toward Tokkatsu on students by performing a correlation check through cross tabulation, followed by a multivariate analysis. Results showed that (1) students who participated proactively in conversational activities and school events (sports) developed high self-esteem and interpersonal skills; (2) support from the homeroom teacher enhanced the effects of increased self-esteem and interpersonal skills brought about by proactive participation in conversational activities; and (3) Tokkatsu were shown to be closely related to class management.

研究分野：学校教育、教科外教育(生徒指導、教育相談、特別活動)

キーワード：特別活動 生徒指導 Tokkatsu 生徒指導の積極的な意義 集団活動 キャリア教育 学校行事 いじめ未然防止

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 学習指導と生徒指導は学校教育を支えている重要な機能である。学習指導における特別活動と生徒指導は、双方のねらいに重なる点が多く緊密な関係にあり、特別活動は生徒指導の実践の場となっている。それゆえ、特別活動の目標を実現することは、生徒指導の充実を図ることとなる。その結果、児童生徒の健全な発達が促進され、問題行動等生徒指導上の諸課題を予防したり、減少させたりすることが期待できる。

(2) 『生徒指導提要』(2010)に示された「社会的なりテラシー」の要素である「対人関係」及び「社会生活」のリテラシーは、特別活動を要として形成され、これが発達促進的、開発的な生徒指導となる。このことを明らかにしていくためには、教員及び児童生徒を対象とし、特別活動により育まれる社会の形成者としての資質・能力と、生徒指導の機能における「積極的な意義」との関係や、因果関係等について、数理定量的な方法により実証していくことが必要である。しかし、そのような研究は見られない。

2. 研究の目的

(1) 特別活動の学習を進めていくためには、生徒指導の機能である「ガイダンス」が大きな役割を果たしている。また、特別活動を構成する「学級活動・ホームルーム活動」「生徒会活動」「学校行事」の目標には、社会の形成者としての資質・能力を育むことが示されている。これら特別活動と生徒指導との関係について、数理定量的に示すことが必要である。そのために本研究では、『非認知的(社会情緒的)能力の発達と科学的検討についての研究に関する報告書』(国立教育政策研究所,2017)に挙げられている能力を援用していく。

(2) 本研究では、図に示した学校教育の基本構造において、学習指導だけでは十分に育むことが難しい第4のR(relation)、つまり、「人間性の教育」が、教育の目標に迫る上で不可欠であり、生徒指導は「人間性の教育」に資する教育活動であると考え、この仮説に基づき、特別活動の充実、生徒指導を生かした教育活動となっていることを実証することを目指した。

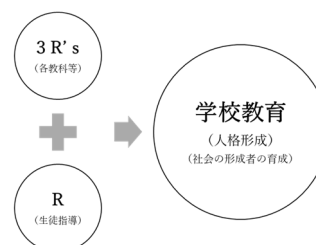


図 学校教育の基本構造

3. 研究の方法

(1) 研究方法は、特別活動で育まれる資質・能力と「生徒指導の積極的な意義」との関係について、数理定量的に明らかにするために質問紙調査を行う。質問紙の作成では、現役の教員や教育行政に関わる経験者、学校管理職等を研究協力者とし、大学生を調査対象として実施された予備調査結果について検討し、そこで得られた知見を質問紙本調査の項目に反映させていく。また、教育課程に位置づけられた授業ではないが、清掃活動、朝の会、帰りの会等、特別活動に係る教育活動も調査の対象とした。

(2) 質問紙本調査の対象は、近畿地区のX市(10中学校)、Y市(4中学校)、Z市(2中学校)の教員と生徒である。調査手続は、研究代表者の所属する学会の研究倫理ガイドラインに沿って対応した。第1回目の調査は、2019年6月から7月に実施された。生徒には、実施要項に基づき対象校の教員による教室での集合調査法により質問票による調査が実施された。また、各校の管理職により教員を対象に任意での質問票による調査を行った。第2回の調査は、2019年11月から12月にかけて第1回の調査と同様に生徒を対象として実施された。

(4) 分析に使用する有効回収数は、教員分が462名(15校)であり、生徒分が8587名(15校)であった。なお、自由記述部分のテキストデータについては、令和4年度以降の継続研究として分析を進めていく。

4. 研究成果

(1) 本研究の目的である特別活動における生徒指導の「積極的な意義」について、「中学生の生活・意識・行動に関するアンケート」大規模調査結果から、特別活動の各種活動への積極性が、生徒にどのような影響を与えているのかを数理定量的に分析していくためにクロス集計による相関を確認後に、多変量解析(重回帰分析・ロジスティック回帰分析)により分析を試みた。

(2) 自己肯定感の推移を従属変数とした多項ロジスティック回帰分析を行った。統制に用いた属性変数からは、男子よりも女子の方が「低 低」カテゴリに入りやすく、2,3年生は1年生と比べて、第1回調査の時点では自己肯定感が低い状態にある傾向がみられる。また、自己認識ではあるものの、成績が高いと「低 低」カテゴリに入りやすく、それらの変数と特別活動への積極性をコントロールした上でみれば、部活動参加者は「高 高」カテゴリに入りやすいことが分かる。特別活動への積極性について確認すると、話し合い活動、学校行事(スポーツ)に対して積極的であると、「高 高」、「低 高」、「高 低」のどの係数も正で統計的有意となっているため、もともと自己肯定感が高い人が積極的に参加しがちであるだけでなく、積極的に参加することで自己肯定感が高まる可能性も示唆される。学校行事(校外)についても、「高 高」、「低 高」の係数が正で統計的に有意となっているため、積極的に参加することで自己肯定感が高まる可能性が示唆

された。

(3) 担任の指導については、「サポートあり・介入あり」だと、「高 高」、「低 高」に入りやすく、「サポートあり・介入なし」だと、「高 高」に入りやすい傾向がみられる。「サポートなし・介入あり」については、どのカテゴリについても10%水準で統計的に有意な係数とはなっていない。今回の分析では、担任の指導の基準カテゴリを「サポートなし・介入なし」としているが、「サポートなし・介入あり」と比較した場合でも、「サポートあり・介入あり」だと、「高 高」、「低 高」に入りやすく、「サポートあり・介入なし」だと、「高 高」に入りやすいといえる。もっとも、担任の指導という変数は、特別活動における指導に限ったものではない。そこで、特別活動における積極性のうち、とくに担任の指導方針の影響が大きいと考えられる話合い活動の積極性と、担任の指導の交互作用項を投入したModel3の推定もおこなった。しかしながら、交互作用項自体は10%水準でも統計的に有意ではなかった。

(4) 人間関係スキルの推移を従属変数とした多項ロジスティック回帰分析を行った。統制に用いた変数から確認すると、女子は男子に比べて、人間関係スキル(の自己認識)が第2回調査時で高いことが分かる。また、2年生は「高 高」、「高 低」に入りやすく、成績中位者と比べて、上位者は「高 高」に、下位者は「低 低」に入りやすいことが示唆された。運動部の生徒は、部活動をしていない生徒に比べて、「高 低」や「低 高」という変化類型に入りやすいことも示唆される。特別活動への積極性について確認すると、話合い活動、学校行事(スポーツ)については、10%水準のものも含まれはするものの、自己肯定感の場合と同様に、「高 高」、「低 高」、「高 低」のどのカテゴリの係数も、正で統計的に有意な結果となっている。その他の特別活動への積極性の影響は限定的であり、特に「低 高」という、人間関係スキルの上昇をうながす影響は、話合い活動と学校行事(スポーツ)のみで確認された。

(5) 担任の指導について確認すると、「サポートあり・介入あり」、「サポートあり・介入なし」の場合に、「高 高」、「高 低」カテゴリに入りやすいことが分かる。担任の指導と話合い活動への積極性の交互作用項を投入したModel3をみると、担任の指導が「サポートあり・介入あり」もしくは「サポートあり・介入あり」であり、かつ話合い活動に積極的に参加した場合に、人間関係スキル「低 高」に入りやすい(人間関係スキルが高まった)可能性が示唆されている。以上の数理定量的な分析結果は、以下の通りにまとめられる。

(6) 第一に、属性的な変数が一定だったとした場合、話合い活動に積極的に参加したケース、また、学校行事(スポーツ)に積極的に参加したケースでは、自己肯定感・人間関係スキルが高まっている様子が確認された。この結果のみで、話合い活動や学校行事(スポーツ)に積極的に参加すると、自己肯定感や人間関係スキルが高まるという因果関係まで積極的に論じることは難しいものの、そのような可能性自体は示唆されたとみてよいだろう。なお、他の特別活動に積極的に参加することの効果は、今回の分析からは見られなかったが、これは、それらの特別活動に積極的に参加する生徒は、話合い活動や学校行事(スポーツ)にも積極的に参加しがちであることから、統計的には有意性を見いだせなかったのだとも考えられる。この点は分析上の限界として指摘しておきたい。

(7) 第二に、話合い活動に積極的に参加すること、担任の指導のあり方の交互作用について、担任がサポートを行っていることが、話合い活動に積極的に参加することが自己肯定感・人間関係スキルの向上にもたらす効果を高めるという結果が得られた。話合い活動に積極的に参加することが自己肯定感や人間関係スキルの向上に結びつくためには、担任がクラスの生徒一人ひとりに話しかけるなどのサポートをしっかりと行うことが重要だといえる。

(8) 特別活動における教師の関わりの規定要因(順序ロジスティック回帰分析)では、教師の特別活動への関わりを従属変数とし、性別、年齢、現任教勤務年数、社会人経験年数、学歴、管理職の有無、学級担任担当を独立変数として、順序ロジスティック回帰分析を行った。その結果、すべての特別活動の関わりに影響を与えている変数は、学級担任ダミーであり、特別活動のすべての活動は、学級経営と密接に関わっていることが読み取れる。また特筆すべき結果として、「クラスでの話合い活動」と「運動会・体育祭などスポーツにかかわる学校行事」以外の特別活動には、現任教勤務年数が正に有意な影響を与えていることが読み取れる。この結果はこれまで指摘されてこなかった結果であり、特別活動が個々の学校文化や校務分掌の継承に強く影響されていることが示唆される。このことについては、学校教育現場を対象としたフィールドワークや、教員を対象としたヒアリングなどの定性的な調査を行うことで、さらなる検証が必要である。

(9) 以上の結果からは、特別活動が生徒に及ぼす影響に係る因果関係まで明らかにするまでには至らないまでも、そのような可能性が示唆されたことは、特別活動と生徒指導との関連についてのエビデンスを示すことができたと考えられる。また、話合い活動に積極的に参加することが自己肯定感や人間関係スキルの向上に結びつくためには、担任がクラスの生徒一人ひとりに話しかけるなどのサポート、つまり、生徒指導の積極的な意義を意識したアプローチが重要であるという知見を得ることができた。

<引用文献>

文部科学省、生徒指導提要、2010

Ashley Montagu, *Education and Human Relations*, 1957.

(邦訳)蜂屋慶、藤本浩之輔、人間関係と人間性の教育、明治図書、1971

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 中村豊、佐々木正昭	4. 巻 第29号
2. 論文標題 重点課題研究プロジェクトC(社会研)報告	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本特別活動学会紀要	6. 最初と最後の頁 89-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 中村豊、池原征紀	4. 巻 5
2. 論文標題 教科指導における生徒指導～中学校国語科におけるルーブリック評価の検討～	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京理科大学教職教育研究	6. 最初と最後の頁 29-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 中村豊、歌川光一、岡邑衛、鈴木翔	4. 巻 4
2. 論文標題 生徒指導で育まれる社会的リテラシーに関する研究～大学生を対象とした予備調査から～	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京理科大学教職教育研究	6. 最初と最後の頁 23-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 鈴木翔、歌川光一、岡邑衛、中村豊	4. 巻 21
2. 論文標題 中学時の特別活動の参加経験と学級生活の関連性に関する検討 - 全国の大学生を対象にした質問紙調査の分析から -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 秋田大学教養基礎教育研究年報	6. 最初と最後の頁 55-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山口泰史、鈴木翔
2. 発表標題 教師のかかわり方の違いは 特別活動の働きにどう影響するか:大規模質問紙調査の分析から
3. 学会等名 日本特別活動学会第2 9回岡山大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 歌川光一、岡邑衛
2. 発表標題 中学生における特別活動への参加意識と学校生活の関連性の検討:大規模質問紙調査の分析から
3. 学会等名 日本特別活動学会第2 9回岡山大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中村豊、歌川光一、岡邑衛、鈴木翔
2. 発表標題 特別活動と「積極的な生徒指導」:社会の形成者としての資質を涵養する特別活動
3. 学会等名 日本特別活動学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村豊
2. 発表標題 生徒指導の機能が作用する教育活動で生徒に養成される資質・能力:中学生の社会的なリテラシーに着目した授業実践の検証
3. 学会等名 日本生徒指導学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村豊、歌川光一、岡邑衛、鈴木翔、添田晴雄、松田素行、原泰弘
2. 発表標題 特別活動と「積極的な生徒指導」:社会の形成者としての資質の涵養
3. 学会等名 日本特別活動学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村豊、鈴木翔、山口泰史
2. 発表標題 特別活動と積極的な生徒指導:社会の形成者としての資質を涵養する特別活動、「中学生の生活・意識・行動に関するアンケート」結果の中間報告
3. 学会等名 日本特別活動学会第2 回研究推進委員会研究情報交換会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中村豊
2. 発表標題 特別活動における生徒指導の積極的な意義:「中学生の生活・意識・行動に関するアンケート」結果からの検証
3. 学会等名 日本特別活動学会第30 回東京大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 徳久治彦編著、分担執筆:濱口太久未、中村豊、七條正典、徳久治彦、坪田知広、須藤稔、住野好久、高橋知己、伊藤美奈子、笹森洋樹、藤原文雄、新井肇	4. 発行年 2019年
2. 出版社 学事出版	5. 総ページ数 160
3. 書名 生徒指導研究のフロンティア第1巻 新しい時代の生徒指導を展望する	

1. 著者名 中村豊（編著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 学事出版	5. 総ページ数 128
3. 書名 「生徒指導提」の現在（いま）を確認する理解する	

〔産業財産権〕

〔その他〕

特になし

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鈴木 翔 (SUZUKI SHOU) (40756855)	秋田大学・教育文化学部・准教授 (11401)	
研究分担者	山口 泰史 (YAMAGUCHI YASUHUMI) (10846124)	東京大学・社会科学研究所・特任研究員 (12601)	
研究分担者	歌川 光一 (UTAGAWA KOUICHI) (50708998)	聖路加国際大学・大学院看護学研究科・准教授 (32633)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	岡邑 衛 (OKAMURA EI) (80735233)	甲子園大学・栄養学部・講師 (34505)	
研究分担者	松田 素行 (MATSUDA MOTUYUKI) (70435246)	文教大学・健康栄養学部・教授 (32408)	
研究分担者	五百住 満 (IOZUMI MITSURU) (00546830)	梅花女子大学・公私立大学の部局等・教授 (34424)	
研究分担者	添田 晴雄 (SOEDA HARUO) (30244627)	大阪市立大学・大学院文学研究科・教授 (24402)	
研究分担者	林 尚示 (HAYASHI MASAMI) (10322124)	東京学芸大学・教育学部・准教授 (12604)	
研究分担者	丹羽 登 (NIWA NOBORU) (80755843)	関西学院大学・教育学部・教授 (34504)	
研究分担者	山西 哲也 (YAMANISHI TETSUYA) (40614699)	淑徳大学・総合福祉学部・准教授 (32501)	
研究分担者	矢野 正 (YANO TADASHI) (60522381)	奈良学園大学・人間教育学部・教授 (34604)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	佐々木 正昭 (SASAKI MASA AKI)		
研究協力者	池原 征紀 (IKEHARA MASAYUKI)		
研究協力者	須藤 稔 (SUDOU MINORU)		
研究協力者	原 泰弘 (HARA YASUHIRO)		
研究協力者	秋山 麗子 (AKIYAMA REIKO)		
研究協力者	重松 司郎 (SHIGEMATSU SIROU)		
研究協力者	中川 靖彦 (NAKAGAWA YASUHIKO)		
研究協力者	中園 大三郎 (NAKAZONO DAISABUROU)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	根津 隆男 (NEDU TAKAO)		
研究協力者	越田 佳孝 (ETSUDA YOSHITAKA)		
研究協力者	黒木 幸敏 (KUROKI YUKITOSHI)		
研究協力者	川口 厚 (KAWAGUCHI ATSUSHI)		
研究協力者	東 豊 (HIGASHI YUTAKA)		
研究協力者	杉田 洋 (SUGITA HIROSHI)		
研究協力者	脇田 哲郎 (WAKITA TETSUROU)		
研究協力者	安部 恭子 (ABE KYOUKO)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	藤本 範子 (HUJIMOTO NORIKO)		
研究協力者	植田 隆義 (UEDA TAKAYOSHI)		
研究協力者	岩城 節臣 (IWAKI TAKEMI)		
研究協力者	松井 典夫 (MATSUI NORIO)		
研究協力者	野村 大祐 (NOMURA DAISUKE)		
研究協力者	濱田 理 (HAMADA OSAMU)		
研究協力者	藤原 靖浩 (FIJIWARA YASUHIRO)		
研究協力者	池田 兼資 (IKEDA KENSHI)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------